
錦繡事変（きんしゅうじへん）

猫目石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きんしゅうじん
錦繡事変

【Nコード】

N9880X

【作者名】

猫目石

【あらすじ】

りんが大雨の中、行方知れずになって三年。

西国では大掛かりな紅葉狩りが催されることになった。

国主の殺生丸以下、主だった重臣がすべて揃う秋の宴。

さて、何が起きるか？

11部の連載です。

？

朱色、鴉色、蜜柑色、深緋、雌黄、木賊色、芝翫茶、松葉、縹色、山吹、海松茶、鶉色、臙脂、この紅葉の見事さをどう表現すればいいのだろうか。

『筆舌に尽しがたい』とは、当にこの事を言うのだろう。

次から次へと色の名を挙げてみるが、きりが無い。

ああ、もう、よそう。

ともかく、赤から黄、茶色から緑と、あらゆる色彩が見事な諧調を保って全山を覆い尽しているのだ。

当に錦秋の名に恥じぬ場景が広がっている。

ここは西国でも紅葉の名所として名高い錦繡山脈の中に位置する小さな盆地。

周囲をグルリと紅葉に彩られた山々に囲まれたすり鉢状の大地である。

敷地に換算すれば三千坪ほどになるだろうか。

盆地のそこかしこに自生する優に千年の樹齢を数えるに違いない銀杏や楓の大木。

その周囲に沿って、これまた様々な色の毛氈が敷き詰められている。

赤、青、緑、黄、紫、茶、白、黒と頭上の紅葉と競うように鮮やかな色彩が乱舞している。

それは、まるで島のように各家の陣地を主張している。

当然、目ばしい大木は有力な家々が独占している。

中でも、一際、見事な大紅葉の大樹の根元には血のように赤い猩々緋の毛氈が敷き詰められていた。

先代の西国王、殺生丸の父、鬨牙王の母方の従兄弟に当たる豺牙^{さいが}一門の物である。

緋毛氈の上座に当たる位置には、漆黒^{しっこく}の絹地に金糸、銀糸の刺繡^{ししゅう}で飾られた対^{つい}の座布団と脇息^{きょうそく}が置かれ主賓の着座を今や遅しと待ち構えている。

「宴^{うたげ}の準備は万端^{ばんたん}、怠りないであろうな」

「ハッ、豺牙^{さいが}様に命じられた通りに全て整っております」

小山のような体躯に縮れた赤毛の男、豺牙^{さいが}は家臣の言葉にニヤリと笑った。

太い眉、丸い大きな目、突き出た鷲鼻、大きな分厚い唇、気の弱い者なら怯えて泣き出しそうな魁偉^{かいい}な容貌である。

「お父さま、殺生丸さまは本当にお越しになるのでございましょうね」

赤い髪の美女が豺牙に問いかける。

豺牙^{さいが}ご自慢の愛娘^{まなむすめ}、由羅である。

幼い頃に亡くなった美人の母親似なのだろう。

由羅は髪の色こそ父親と同じ赤毛だが中々の美姫である。

純白の白絹に秋の草花を散りばめた豪華な打ち掛けを身に纏^{まと}う由羅は見ようによつては花嫁のように見える。

豺牙が普段の銅鑼声からは及びもつかない潜めた声で由羅に注意を

促す。

「間違いない。よいか、由羅。そなたの魅力で、必ずや、あ奴を骨なしにするのだぞ」

「うふふつ、お任せ下さい、お父さま。必ずや殺生丸さまを私の虜とりこにしてみせますわ」

己の容貌に相当な自信があるのだろう。

由羅は紅い唇をほころばせ高慢な言葉を返す。

外見こそ余り似ていないものの、そこはやはり親子、由羅の内面も父親の豺牙と大して変わりが無い。

つまり、どこまでも権力と財力を追い求める欲望の権化なのである。

遠い空にポツリと小さな点が映うつった。

それは良く見ると一列に連なった行列でユックリと盆地に近付いてくる。

列の先頭を走るのは希少な双頭の竜、阿吽またがに跨った西国王、殺生丸。右肩に流れる華麗な白銀の毛皮には従者の小妖怪、邪見がしがみ付いている。

その後、重臣の尾洲と万丈、側近の木賊とくさと藍生あいおい、殺生丸の乳母であった女官長の相模、以下、続々と家臣が続いている。

「おいでになったようだ。皆の者、そそうのないようお持て成したせ」

ハッ！

野太い声の主の命令に家臣一同が声を合わせて答える。

同時に豺牙は腹心の部下に目をやり声なき合図を交わしていた。

（手筈は良いな？）

（仰せのままに）

これまで豺牙は殺生丸と由羅を結びつけるべく様々な策を巡らしてきた。

当代の西国王、殺生丸には先祖の呪のせいもあつて親類縁者が非常に少ない。

だからこそ、殺生丸の父の従兄弟という本来ならば遠縁でしかない
 豺牙が、当主が不在の間、縁戚として権勢を揮うことが出来た。

だが、本来の主、殺生丸が帰還した今、以前のように西国王の縁戚として好き勝手に税を徴収したり領地を強奪する真似は出来なくなつた。

それどころか、旧悪を暴か^{あば}れる怖れさえある。

ここのまま手を拱こまねいていては縁戚としての立場さえ危うい。

そう考えた豺牙は、より強力な立場を手に入れるべく、即、行動を開始した。

西国王の舅しゅつとという外戚がいせきとして、これ以上ない強力な立場を手に入れる為に、豺牙はあらゆる機会を通して自分の娘の由羅を売り込んだ。殺生丸と由羅が婚姻を結んだ後は男子を産んでくれれば万々歳。そうなれば男孫を後継者として擁立ようりつし、その後見としてジワジワと

立場を強め西国の実権を握る。

だが、そうした豺牙の計画を阻害する存在が浮き彫りになった。

三年間、殺生丸が欠かさず三日おきに通う人里に住まう人間の小娘。邪魔な芽は摘まねばならない。

周到なる準備の下、豺牙は部下に命じて人間の小娘を始末させた。

まず大水を降らせる為に雨師と風伯に頼み込み大水を降らせた。

その上で毒蛾の蛾々が幻惑の術で増水した川の近くに小娘を誘き寄せ川に落とし込んだのだ。

状況から見て誰もが溺死したと思っただろう。

もう今から三年も前のことだ。

豺牙は、この宴が事実上の婚礼と周囲の者に認識されるよう画策してきた。

真紅の毛氈、対の座布団、脇息、御膳立ては全て調った。

後は主役の殺生丸と由羅が揃いさえすれば良い。

殺生丸に饗する酒には予め強力な媚薬を仕込ませてある。

国主の殺生丸を始めとして犬妖族は尋常ならざる嗅覚を有している。人間なら、到底、気付くはずもない微かな異臭でさえ彼らは感知する。

それをごまかす為に屠蘇散を大量に入れ『薬酒』と銘打って用意させた。

更に酒肴には精力を増強させる山海の珍味佳肴を取り揃えてある。

要は主賓の場に殺生丸が就いてくれさえすれば、ほぼ豺牙の企ては成就するのだ。

後は済し崩しに婚姻を成立させてしまえば良い。

己が目論みの成功を確信した豺牙は込みあげてくる笑いを押し殺すのに苦勞していた。

『錦繡事変？』に続く

？

りんが生きていると殺生丸が知ってから、かれこれ一年が経とうと
している。

あの方士、方斎の占いでは、りんは間もなく戻ってくると聞いた。
それ以来、殺生丸は暇を見つけては人界へ渡り、りんを捜し歩いた。
だが、僅かな手がかりさえ見つからず現在に至る。

本当に、あ奴の易占は当たるのだろうか？

日毎に殺生丸は苛立ちを募らせていた。

(りん、りん、何処にいる！？)

今日とて人界へりんを捜しに行きたいのに、くだらぬ催しに顔を出
さねばならぬ。

紅葉の宴だ！？

ハッ、何でも豺牙めが強硬に主張したらしい。

豺牙・・・今は亡き父上の母方の従兄弟。

本来なら縁戚とも言えぬような遠縁。

にも拘らず私が西国を留守にしていた間、あ奴は血筋を盾に要職に
就き、散々、甘い汁を吸ってきたらしい。

典型的な虎の威を借る狐だ。

大して能力もない癖に権力欲だけは強い輩などに用はない。

少し奴の身边を調べただけで唾棄するような不正行為がゴロゴロ出
てきた。

悪行の証拠を突き付け一日も早く罷免してくれるわ。

罪状が目之余るようなら死罪もありうる。

そんな物騒な思いを抱きながら殺生丸は阿吽から降りた。
すると、こちらの到着を待ち構えていたのだろう。

豺牙がゾロゾロと一門を引き連れてやって来た。

一応、奴が一番近い親戚筋になるからな。

見るともなく目をやれば満面の笑顔が気色悪い。

テラテラと赤い顔は恐らく酒浸りのせいであろう。さけびた

『相変わらず、いけ好かない奴だ』と殺生丸は感じた。

心の中では、こちらを青二才と嘲りながら表面上は甘言を弄して従
う素振りを見せる男。

殺生丸は豺牙の顔を半眼で眺めつつ、益々、内心の決意を固めた。

「ようこそ、おいで下されました、殺生丸殿。ささつ、どうぞこち
らへ」

やけに上機嫌な豺牙が挨拶もそこそこに主賓の座に殺生丸を着かせ
ようと先に立って歩き始める。

用意された宴席を見れば猩々しやうじやう緋の毛氈けいせんに設けられた豪華な対の座布
団きふだんと脇息。

その設えを見た殺生丸は勿論、従者の邪見、重臣の尾洲、万丈、側
近の木賊とくさく、藍生、女官長の相模が一樣に顔を顰めた。

瞬時に豺牙の狙いを読み取ったのだ。

本来ならば主賓は殺生丸のみ、座布団は一客で良いはず。
それなのに、何故、座布団が対^つなのか？

一方の座布団に殺生丸様が座るとして、もう片方には誰が？
見ている限り、豺牙が横に座る気は毛頭^{もうとう}ないらしい。

尾洲や万丈は重臣ではあるが家臣の為、殺生丸の横に座る訳にはい
かない。

側近^{とく}の木賊や藍生、女官長の相模にしても同様である。

となると、この場において殺生丸の隣りに座ることが許される身分
の者は唯一名。

豺牙の娘、由羅のみである。

不味^{まず}い！

この状況は非常に不味^{まず}い！

これが単なる茶を飲む程度のことならば問題はない。

しかし、この場合は酒食を供する宴席。

然^{しか}も、由羅の装いは純白の絹地に秋の草花を散らした美々しい打ち
掛け。

見ようによつては、まるで花嫁のように見える衣裳。

いや、気のせいではない。

明らかに、そう見えるよう意識して装つたに違いない。

『謀^{はか}られた！』

殺生丸を始め一行の誰もが豺牙の意図する処に気付いた。

豺牙に誘導されるがまま殺生丸が席に付けば相手の思う壺^はに嵌^はまっ
てしまう。

何しろ、この宴には西国の主だった者が集まっている。

このままでは紅葉の宴が婚礼のお披露目の宴と勘違いされてしまう
怖れが多分にある。

殺生丸は西国に帰還して以来、これまで一度も公式の催しに出席したことがない。

謂わば、この紅葉の宴が初の『お目見え』となる。

事前にそうと知ったせいだろう。

今回の宴に参加する家の数が鰻登りに跳ね上がった。

そうと知った上での豺牙の強行だった。

豺牙は高を括っていた。

礼儀から云っても殺生丸が着座を拒否するはずがないと。

それに男なら美しい娘が同席するのを喜びこそすれ否みはすまいと勝手な思い込みをして。

周囲がやきもきする中、豺牙の娘、由羅はウツトリと殺生丸に見惚れていた。

双頭の竜に乗って空から降り立った西国王は噂に違わず美しかった。白銀の髪は陽を弾いて煌き秀麗な容貌は寸分の狂いもなく刻まれた彫像のように端整で夢のように麗しい。

三年前に帰還して以来、殺生丸は西国内では武家の棟梁に相応しい直垂を着用するようになっていた。

以前の振袖と指貫に妖鎧を装備したお馴染みの戦装束は専ら人界へ赴く時のみとなっている。

今、殺生丸がお召しになっているのは青味を帯びた銀の共布で仕立てられた直垂。

光沢のある絹地に織り出された見事な柄行は優美に空を舞う鷺の姿。腰に差すのは二本の大刀、朱塗りの鞘の天生牙と白木の鞘に雷紋を彫り込んだ爆碎牙。

優雅にして華麗、尚且つ凜々（りり）しい貴公子ぶりに男女に限らず誰もが目を奪われた。

由羅とて例外ではない。

初めて見た殺生丸に一目で心惹かれた。

（何としても、あの若く美しい御方の妃になりたい）

由羅の心にムクムクと願望が湧き上がる。

殺生丸を己の容色で籠絡しようと宴に乗り込んできた由羅は逆に西国王の美貌に魅せられ、あからさまに秋波を送っていた。

このまま、父、豺牙の狙い通りに事が進めば由羅の望みが現実となる可能性は高い。

妖界でも最大領土を誇る大国、西国の王、その妃ともなれば誰もが傳き、どんな贅沢も我が儘も思いのままである。

それは、まさしく由羅が思い描いてきた栄耀栄華に満ち溢れた未来そのものと言っている。

殺生丸の傍らに妃として寄り添う己の姿を想像して由羅は独り悦に入っていた。

由羅が白昼夢に浸っている最中、周囲がザワザワと騒ぎ出した。見れば、皆、空を仰ぎ見ている。

不思議に思っ て視線を空にやれば、静々（しずしず）とこちらに近付いてくる一群が目に入った。

遠目にも一群が煌びやかな女性の集団とハッキリ判る。

中央の牛車を守るように十数名の女房衆が周囲に控えている。

それは、今回、誰もが出席するとは予想もなかった西国一の貴婦人、前西国王妃にして当代西国王、殺生丸の御生母さま、狗姫いぬぎの御方の御一行だった。

【直垂ひたたれ】：「犬夜叉」コミックス13巻に登場する若殿、人見蔭刀ひとみかげわき殿（＝奈落）の城内での衣裳を参考にして下さい。

『錦繡事変きんしゅうじへん?』に続く

？

艶やかな一行は殺生丸や豺牙から少し離れた位置に静かに降り立った。

地面に着地すると同時に牛車に繋がれていた三つ目の妖牛が大きく嘶いた。

ブモオ~~~~~

通常よりも一回り大きな牛車に相応しく、それを牽く牛も並みの大きさではない。

手入れが良いのだろう。

全身、真つ黒な毛並みがツヤツヤと黒光りしている。

大きく頑丈そうな胴体を支える逞しい四肢、頭から突き出た大きな角、見事な体軀である。

もし闘牛に出したとしても楽々と優勝しそうな威容を誇る牛だが、妙に愛嬌がある。

それは妖牛の顔のせいだった。

何とも惚けた感じがする三つ目、その顔を見たが最後、誰もが、緊張など何処かに忘れ去ってしまうからだろう。

そのせいか、威圧感を与えるほど大きな体格にも拘らず、牛飼いは勿論、お付きの女房衆からも可愛がられているらしい。

牛車から妖牛が離され轅が下ろされた。

牛車の箱、または屋形とも呼ばれる乗車部分の前に搦が置かれる。

お付きの女房が二名がかりで御簾をスルスルとたくし上げた。
屋形の中からスツと御出座しになったのは西国で最も高貴な女性。
前西国王妃にして当代さまの御生母、王太后の狗姫の御方である。

絶世の美姫として世に名高い前王妃は、襟元は朱金、そして次第に
金へと色が変化するボカシ染めの技法を駆使した絹地に大輪の菊と
南天をあしらった優美な打ち掛けを身に纏っておられた。

菊は文字通り『秋』を象徴する花、南天は『難』を『転ずる』の意
味から縁起物として喜ばれる草木。

秋という季節に合わせた高雅にして艶麗な趣きの衣裳である。

牛車から降りられた狗姫の御方は女房達を引き連れ殺生丸の方へや
つて来た。

当然、豺牙は西国に属する臣下として挨拶せねばならない。

（なつ、なぜ、狗姫の御方が、ここに！？）

豺牙が、うつたえるのも無理はない。

鬪牙王が身罷つて以来、かれこれ二百年が経つが、これまで狗姫が
公式の場に姿を現したことは殆どなかったのだ。

だからこそ、今回の宴も、勿論、欠席と見込んで何の用意もしてい
なかった。

狗姫の不意の登場に、内心、慌てふためきながらも、そこは流石に
古狸、豺牙は狼狽する気持ちやグツと堪え殊勝な顔を作り挨拶した。

「こつ、これは狗姫の御方さま、ご来臨を賜わり誠に恐縮至極に存
じます」

「豺牙か、久しいな、邪魔するぞ」

狗姫は、そう宣^{のたま}うと直ぐさま筆頭女房の松尾に頷いた。
すると、それが合図だったのだろう。

松尾が後方に控えていた女房衆に声を掛けた。
すぐさま狗姫に付き従ってきた十数人の女房達がキビキビと動き始めた。

血のように赤い猩々緋の毛氈に瑠璃色の毛氈が次々と足され忽ち宴席が拡がる。

上空から見れば赤の陣地に青の陣地が喰い込むように見えただろう。
そして狗姫は何喰わぬ顔で微笑みながら豺牙の姦計を潰^{つぶ}しにかかった。

「どれ、わざわざ豺牙が対^{ついで}で用意してくれた席だ。殺生丸、妾^{わらわ}と並んで座るがよいぞ」

「・・・・・・・・」

殺生丸に否やはない。

用意された主賓の座に母と息子は並んで着座した。
この場に狗姫が現われた時点で豺牙の計画は初^し端^はから躪^{しめ}いた。
今、ここで、西国王である殺生丸の横に座れるのは身分からいって王太后の狗姫を置いて他にいないのだ。

豺牙は周到に仕組んだ目論見の一端が頓挫したことを覚った。
とはいえ、まだ計画の全てが瓦解した訳ではない。

要は殺生丸が由羅に籠絡されてしまえばよいのだ。

その下準備として殺生丸に饗する薬酒には強力な媚薬が仕込まれて
いるし、肴は精力を増強させる物ばかりを用意してある。

素早く気持ちを立て直し豺牙は家臣に酒と肴を出すよう口を開きか
けた。

その矢先、狗姫が豺牙の機先を制するように声を掛けた。

「突然、押しかけて済まん、豺牙。せめてもの詫びに酒と肴を用
意させた。遠慮なくやってくれ」

「あつ、いや・・・その」

狗姫に付き従ってきた女房衆が次々と贅を尽した山海の珍味を盛り
付けた膳を運び込み主だった家臣の前に置いていく。

如何に豺牙が古狸とはいえ最高権力者を二人も前にしてゴリ押しは
出来ない。

不満気に口を噤むしかなかった。

更に酒を満たした徳利と盃が大量に運ばれ宴席を埋め尽した。

酒食を全て狗姫に提供されてしまった以上、豺牙は一言も口を挿め
ない。

この時点で豺牙が用意した酒と肴は完全に『用無し』とされてしま
った。

「ほれ、殺生丸、盃さかずきを取れ。薬老毒仙から巻き上げた“切れずの瓢ふうへ”ぞ」

そう云つて狗姫は松尾から受け取つた瓢箪ふうたんを振つてみせた。
チャポチャポ・・・中の酒が揺れる音がする。
瓢箪に巻き付けられた赤い飾り紐ひもがユラユラと揺れる。

「・・・薬老毒仙」

「んっ、そなたも知つておろう。あの助兵衛爺と妾めかけとの一件を」

「・・・・・・・・」

「ふふっ、この“切れずの瓢”は妾の嫁入り道具の一つ。酌くめども酌くめども酒が尽きぬ不思議な瓢箪。どれ、殺生丸、そなたも妾も音に聞こえし酒豪。今日は思う存分、飲み明かそうではないか」

そんな狗姫の言葉に殺生丸が無言で盃を差し出す。

国主親子が酒を酌み交わすと同時に華やかな宴が始まった。

【轅ながえ】：牛車の前方、左右に長く前に出ている木のこと。

【搦^{しじ}】：机のような形をした台で、車から牛を放した時に車を水平に保つため軛^{くびき}の下に置くもの。

『錦繡^{きんしゅう}事変^{じへん}?』に続く

？

陽が陰る。

いつしか夕闇が迫っていた。

辺りが暗くなりだした。

ボツ、篝火^{かがりび}がいくつも点^{とも}され辺り^{あた}を照らし出す。

赤々と篝火が揺れる中、鼓を打つ音が響く。

カッポン、カッポン、カッポンポン・・・ポン！

それを合図に笛の音、箏^{そう}の音が鳴り響く。

幽玄の調べに合わせ由羅が扇を手に舞い始める。

宴^{たけなわ}が酣^{さな}になろうとする最中、豺牙^{さいが}が狗姫と殺生丸に余興を申し出た。
娘の舞を一指^{ひとさ}し御目にかけたいと。

豺牙は焦りに焦っていた。

慎重に練り上げ準備した目論見は出端^{でしな}から挫^{くじ}かれ潰されてしまった。
始めから全てが自分の思惑から外れてしまった。

あの土壇場に狗姫の御方が現われさえしなければ・・・。

主賓の座には由羅と殺生丸が並んで座っていたはずだった。

そして、強力な媚薬入りの酒と精力を増強させる珍味佳肴が作用して殺生丸を籠絡しようとする由羅を大いに助けていたはずなのだ。
それなのに、今、殺生丸は主賓の座に母の狗姫と同席している。

酒と肴も狗姫によって用意され、豺牙が用意した代物は全くの用無し状態に陥っている。

このままでは殺生丸を由羅に籠絡させ時間をかけて西国の実権を握ろうとする自分の遠大な計画が水泡に帰してしまふ。

（クツ、何とかせねば。どうすればいい。そうだ、あの手があったではないか！）

豺牙は思い付いた策を実行すべく、早速、次のように殺生丸と狗姫に願いでた。

「殺生丸さま、狗姫の御方さま、我が娘、由羅が、余興に舞を披露したいと申しております。お許しいただけますでしょうか」

この豺牙の申し出に対し、狗姫は、瞬時、思案した。

（豺牙め、まだ殺生丸の籠絡を諦めてはおらぬらしい。まだ足掻くか。流石に古狸ふるだぬき、実にしぶといことよ）

内心、呆れつつも、奴らが、どのような手管を使ってくるのだろうかと思うにつけ狗姫の悪戯心いたずらじしんに火がついた。

（面白い、舞の披露を許可してやろうではないか。勿論、殺生丸も同意の上でな）

斯くして由羅は殺生丸と狗姫の前に進み出て舞を始める仕儀となった。

さてさて、豺牙親子は如何なる手段を用いてくるのか。

狗姫は目を細めて由羅が舞を始めるのを待った。
宴に参加している殆どの者が注視する中、ユラリと由羅が手にした
扇を開いた。

すると、扇から蝶が二匹、忽然と現われヒラヒラと舞うように飛び
始めた。

朱、青、黄、黒、白、鮮やかな四枚の翅はねに孔雀の目のような模様。
珍しくも美しい蝶、あれは孔雀蝶ではないか。

蝶の羽から撒き散らされる燐粉が篝火に照らされキラキラと妖しく
輝く。

（あの燐粉・・・幻惑の術か！？）

咄嗟とつとに狗姫は袂たもとの中で印を結び気合いで周囲に結界を張り巡らした。
ピン！ 大気が張り詰める。

殺生丸も、こちらの意図に気付いたのだろう。

極々、わずかではあるが眉間に皺を寄せ顔を顰しかめている。

一見、辺りあたには何の変化も見当たらない。

だが、実際には狗姫を中心に強力な結界が、四方、十間（じゅっけ
ん＝約18・2m）に亘り張られていた。

金色の燐粉が見えない壁に阻まれサラサラと垂直に零れ落ちていく。
由羅の幻惑の術に気付いた者は、妾わいわの他には恐らく、殺生丸、尾洲、
万丈、松尾、それに西国女官長の相模、側近の木賊とくさと藍生ぐらいで
あろうな。

狗姫は、周囲の様子から判断して、そう見当をつけた。
他の者達は、皆、由羅の舞に魅せられ気付きもしない。

豺牙の娘、由羅なる女の扇から蝶が現われるのを見た瞬間、殺生丸の脳裏に三年前の女退治屋の言葉が甦よみがえった。

確か、琥珀の姉で名を珊瑚とかいった。

あの時、女退治屋は、声を詰まらせながら最後に見かけたりんの様子を必死に言い募つっていた。

『蝶がつ！見たこともない・・綺麗な蝶が・・飛んでたんだ。りんは・・それを追って川の方へ。その後・・直ぐに雨が降りだして・・。これ迄に経験したことがない・・もの凄い大雨だったんだ。アツという間に水が・・そこら中から溢あふれ出して・・りんを・・捜しに行くことさえ・・出来なかったんだ！』

りんは行方知れずになる前に珍しい蝶を追って川の側へ行っていた。その話から導きだされる答え・・。りんは、わざと川の近くに誘い込まれたのか！？

今迄、りんの失踪にばかり気を取られ、その可能性に気付きもしなかったが。

ということは・・この幻惑の蝶・・豺牙の仕業か！？

殺生丸の脳裏に『りん失踪』の真相が稲妻ひらめのように閃いた。

それと同時に隣となりに座る母親が無言で結界を結んだ。狗姫を中心に、突然、四方に張り巡らされた結界。一気に周囲の気が張り詰める。

（この結界！母上か！？）

視線を横に流せば目に映るのは自分と酷似した白皙の顔。

『おや、気付いたか』と云わんばかりの母のしたり顔が飛び込んできた。

この事態を楽しんでいるのだろう。

瞳は躍るように輝き口角が上がっている。

忌々（いまいま）しいが素早い対応は流石というべきか。

空中に撒き散らされた蝶の燐粉が煌めきながら下に落ちていく。

結界に阻まれ殺生丸と狗姫の位置にまで到達できないのだ。

成る程、この燐粉で私を幻惑する積りだったのか。

愚かな・・・私は毒に耐性がある。無論、母上もだ。

豺牙め、こんな子供騙しの術が効くと思ったのか？

殺生丸は地面に散らばる夥しい燐粉を厳しい目で見据えた。

もし、これが日中だったなら気にも留めず見過ごしたかもしれない。

だが、今は宵闇の中、燐粉は篝火に照らされキラキラと輝き、豺牙

親子が何を企んでいたのかを明らかにしていた。

『錦繡事変？』に続く

？

腸が煮えくり返る。

殺生丸は渦のように体内で逆巻く怒りの奔流を必死に抑えていた。もう間違いない、豺牙、りん失踪の首謀者。

今直ぐ奴の首に手を掛けて捻じ切ってしまいたい！

だが・・・証拠がない。

如何に、奴が怪しくとも証拠もなく断罪はできぬ。

ギリギリ・・・

握り締めた拳に爪が喰い込み皮膚を破って血が滲みだす。

余りにも激しい怒りが痛覚を麻痺させ痛みを感じさせない。

殺生丸は険しい目で豺牙を睨みつけていた。

そんな殺生丸の激怒と焦燥を逸早く感知したのは、やはり母の狗姫そんな殺生丸の激怒と焦燥を逸早く感知したのは、やはり母の狗姫だった。

拳の中に握り込んでいるが故に殆ど漏れていないはずの息子の血の匂いを犬妖族ならではの鋭敏な嗅覚で嗅ぎ付けたのだ。

（これは・・・血の匂い。そうか、殺生丸、事の真相を察知したか。されど、今しばし待て。堪えるのだ）

由羅の舞が終わるのを待つて狗姫は立ち上がり言葉をかけた。

「見事であつたぞ、由羅とやら。舞の返礼に、こちら余興を用意した。松尾、あれを」

「はい、さつ、こちらへ」

松尾の指示の下、数名の女房が布で覆いをかけた大きな荷物を牛車から運び出してきた。

何故か大きな黒い妖牛まで一緒に牽かれてくる。

荷物は形状から見て余り厚みがない。

狗姫は、それを自分の前方に置かせ、妖牛は少し後方に待機させた。

徐に狗姫が掛け布を取り払った。

パサッ・・・

現われたのは狗姫の身長ほどもある楕円形の鏡。

重厚な台座に固定されている。

狗姫が大きな鏡の前に説明を始めた。

「これはな、“遠見の鏡”といつて、どんな遠方でも見ることの出来る不思議の鏡だ。元々は西国城の宝物庫に秘蔵されていたのだが、それでは折角の宝の持ち腐れ。三百年前に妾が譲り受け、以来、愛用してある。これは中々に面白い鏡でな。命じさえすれば、一度、映したものを再び映し出すことが可能なのだ。よつて、今から皆に妾が三年前に見たものを御覧にいれよう。幸い、今宵は月もない。さて、凱風よ、頼むぞ」

ブモオ~~~~~

凱風^{がいふう}と呼ばれた妖牛は、主の言葉に『了解』とばかりに、一声、大きく嘶^いいて三つ目をカツと光らせた。

通常の両目は前方の“遠見の鏡”を照射し、天眼とも呼ばれる第三の目の光は夜空に向かう。

両目に写し取った映像を天眼が拡大して空に投影しているのだ。

紅葉の宴が催されている盆地は、すり鉢のような形状になっている。従って頭上にはポツカリと円形の夜空が覗^{のぞ}いている。漆黒の闇夜を背景に大きく映し出されたのは、のどかな春の風景だった。

満開の桜の太木の下、根元に腰掛ける殺生丸、従者の邪見、そして、桜の花を手に受けようとする人間の少女の姿。

（りんっ！）

驚愕に殺生丸の目が大きく見開かれる。

主と同様、邪見も衝撃を受けていた。

唯でさえ大きな出目を更に引ん剥^むき、パクパクと口まで大きく開けて阿呆面^{いひめ}を曝^{さら}しつつ夜空を見上げている。

ハラハラと舞い散る桜の花びら、無邪気に笑う少女、何やら小言を呈している従者、両者の遣り取りを見るともなく見ている殺生丸。

それは紛れもなく三年前のあの日の再現だった。

思い出せば泣きたくなるほど穏やかで幸せな思い出の一幕。
場面は直ぐさま切り換わる。

ヒラヒラと舞い飛ぶ二匹の蝶を追いかける少女。

赤、青、黄、黒、白、鮮やかな蝶の翅はねには目の模様がある。

先程、由羅の扇から出現した蝶と全く同じ模様だ。

突然、二匹の蝶は掻き消すように消えた。

少女が周囲をキョロキョロと見回す。

すると、それまでの晴天が嘘のように曇りだし天から大粒の雫しずくが降り始めた。

滝のように降り注ぐ雨は少女をアツという間にずぶ濡れにしてしまう。

家に帰ろうとする少女の前に立ちはだかったのは妖しい美貌の妖怪。
一見、女とも見紛う顔、だが、その顔から下を良く見れば男ならではの喉仏のどぼねがある。

背に生えた大きな羽、色白の顔を奇妙な形で隈取る赤、青、黄、緑の化粧。

全てが異様なまでに毒々しく不吉だった。

（あ奴はっ！？）

殺生丸は男に見覚えがあった。

今から百年ほど昔、殺生丸が人界を放浪していた頃、『迷蝶の森』
で絡んできた妖怪だった。

蝶に誘い込まれ森の中に踏み込めば道に迷い二度と戻れなくなる。

そうした噂から、何時しか『迷蝶の森』と呼ばれるようになった場所がある。

単なる噂だろうと殺生丸が試しに森の中に入ってみた処、誘蛾族の奴に出交^{でく}わしたのだった。

誘蛾族は蝶の式鬼^{しき}を使って相手を難所^{なんしょ}に誘い込み毒で仕留める妖怪である。

通常、誘蛾族は雄は雌を雌は雄を惑わすものだが、奴は雄でも雌でもお構いなしの両刀使いだった。

名は何と云っただろうか、そうだ、極めて毒性の強いことから“毒蛾の蛾々”と呼ばれていた。

美形を特に好み得意の鞭^{むち}で散々に弄^{もてあそ}んでから鬺^{なぶ}り殺すという悪癖を持つ男だった。

迷蝶の森に足を踏み入れた私を見た途端、いつものように獲物で遊ぼうとしたのだろう。

奴が鞭で攻撃を仕掛けてきた。

そういえば、あの時も周りに先程の舞と同じ蝶が飛んでいたな。興味がないので碌^{ろく}に見もしなかったが。

蛾々が鞭^{むち}を得物にしているように私も鞭を使う。

同じ妖鞭で対抗する術^{すべ}もあったが、そうすると時間が掛かる。

あんな奴に付き合っ^てやる義理はないので速攻で間合いを詰め毒華爪で片をつけてやった。

通常ならば、あれで死ぬのだが、奴も毒を体内に保持する妖怪。私の毒に負けはしたものの命を落とすまでには至らなかったのだから。

如何なる経緯いきさつかは知らぬが、豺牙さいがは毒蛾の蛾々を雇った。
そして、りんを襲わせたのだ。

『錦繡事変きんしゅうじへん?』に続く

？

次々と腑に落ちない点が疑問として殺生丸の脳裏に浮かんでくる。
三年前、未曾有の大雨が人界を襲った。

滝のような雨が、二日二晩、休みなく降り続いたという。

大雨が降りだした日に、りんは行方知れずとなった。

丁度、私が妖界へと戻った翌日だった。

私の不在を待っていたかのように雨は降りだした。

そして、りんに逢う為、私が人界へ渡る前日に雨はピタリと降りやんだ。

今にして思い返せば何とも胡散臭い。

どう考えても都合が良すぎる。

ということは・・・あの大雨さえも豺牙の仕組んだことなのだろう。

殺生丸は己の迂闊さに目が眩む思いだった。
掌に喰い込む爪が更に深くなる。

今、殺生丸の目の前で明らかになりつつある三年前の『りん失踪』
の真実。

大雨で増水する危険な川の側へ、りんを誘い込んだ蝶は毒蛾の蛾々
という妖怪が操る式鬼だった。

女顔の妖怪は鞭を得物に、りんに襲いかかる。

右へ左へ蛇のようにくねる鞭、土砂降りの雨が降る中、りんが逃げ
惑う。

ぬかるみに足を取られ、りんが転んだ。

泥で汚れた、りんの顔、着物。

恐怖に怯えるりんを見て男は嘲笑う。

奴は鼠を甚振る猫のように、りんを弄んでいた。

（出来るものならば、今直ぐにでも、奴の笑っている顔を引き裂いてやりたい！）

殺生丸は激情が血のように赤い靄となって己を呑み込もうとしているのを感じた。

三つ目の妖牛、凱風が夜空に投影する映像は尚も続く。

水の音が聞こえてきそうな程、驚異的に増えていく川の水量。

溢れる水はドンドン川幅を拡げ勢力を増しつつあった。

川に流れ着く前に土を削り取ってきたのだろう。

水の色は透明度を失い濁った黄土色へと変化していた。

頃は良しと見たのか、男が、一際、大きく鞭を振りかぶった。

それまで、毒蛾の蛾々は髪の毛ひと筋の差で、りんに触れないように鞭の動きを制御してきた。

奴の力量からすれば造作もないことだろう。

次の瞬間、初めて、蛾々の鞭が、りんに触れた。

何かを狙ったような動きだった。

りんの顔の右側を僅かにかすめて鞭は離れた。

それでも、かなりの衝撃だったのだろう。

水飛沫^{みずしぶき}を上げ川に落ちるりん。

降りしきる雨の中、孤を描いて毒蛾の蛾々の手に何か落ちてきた。それは、殺生丸が、りに贈った紅白の飾り紐^{ひも}だった。

他にも何本か髪紐を贈ったが、紅白の色合いが、初めて殺生丸から貰った市松模様の着物を思い出させると云って、りんの一番のお気に入りだった。

川に落ちたりんは必死にもがいていた。

りんは泳げない。

以前、神楽が、御霊丸^{ごりょうまる}なる者に攻撃を受けて川に落ちた時もそうだった。

自分が金槌^{かなづち}にも拘らず神楽を助けようとして川に入ったりん。

結果的に、りんは溺れかけ殺生丸が助ける羽目となった。

神楽と邪見は阿吽に命じて助けさせた。

あの後、殺生丸は、りんを溺れさせた邪見に『監督不行き届き』として拳をくれてやったのだ。

もう六年も前のことになる。

だが、追憶に耽^{ふけ}っている暇はない。

更なる危険が、りに迫っていた。

絶え間なく降り注ぐ雨のせいで爆発的に増えた川の水は荒れ狂い水流を速める。

激流に変化した川の水に乗って太い丸太が何本も、矢のように、りんの方に流れ下ってくるのが見えた。

「りんっ！」

思わず立ち上がって殺生丸は叫んでいた。
後で気付いたが邪見も同様だった。

一本の太い丸太が、りんの顔を直撃した。
ゆっくりと水面にりんが沈んでいく。

水面に散った赤い色・・・りんの血だ。

毒蛾妖怪は、りんが見えなくなるのを確認すると、ニヤリと笑って
翅^{はね}を飛ばたかせ姿を消した。
そこで、フツと映像は消えた。

ブモオ~~~~~

『これで終了』とばかりに三つ目の妖牛が嘶^{いなな}く。
空は元通りの闇夜に戻っていた。

殺生丸の目は激情に昂^{たか}ぶり虹彩を残して真っ赤に変化していた。
頬に流れる妖線も太く大きくなり始めている。

シュウ~~~~~

余りの憤怒に喰いしばった歯の間から荒い呼吸が漏^もれる。
極限にまで膨れ上がった怒りのせいで人型が崩れかけている。
今にも犬妖族の本性のままに変化^{へんげ}してしまいそうだった。
殺生丸は、それほどまでに激怒していた。
その時、凜とした声が横から響いた。

母の狗姫だ。

「権佐、奴を、ここへ」

姿を隠して背後に控えていたのだろう。

西国お庭番の頭領、権佐が声だけで応える。

「はっ！」

一体、誰を連れてこようと言っただろう。

殺生丸は母の言葉に訝^{いぶか}しんだ。

権佐が配下のお庭番数名と共に姿を現した。

何者かを捕縛^{とら}しているらしい。

妖力封じの縄を使用した上に猿轡^{さるくつわ}まで噛ませている。

男の顔を見た瞬間、殺生丸の自制心は吹き飛びそうになった。

それは、殺生丸が、何度、八つ裂きにしても飽き足りない男。

つい今しがた、いや、三年前、りんを川に落としこんだ毒蛾の蛾々だった。

『^{きんしゆつじへん}錦繡事変？』に続く

？

（塵ひとつ残さず、この世から抹殺してくれる！）

激しい復讐の思いに駆られて殺生丸は毒蛾の蛾々に向かって爆碎牙を抜き放とうとした。

だが、そんな殺生丸を止めたのは意外にも母の狗姫いぬぎだった。

「待て、殺生丸」

「何故、止める、母上」

「刀を納めろ。そ奴には、まだ吐かせねばならん事があるのだ」

狗姫は豺牙さいがに視線を向け言葉を発した。

酒に焼けた豺牙の赤ら顔は先程から紙のような蒼白に変化していた。よく見れば額に細かな脂汗をジツトリと滲にじませている。

「豺牙よ、こ奴に見覚えはないか」

「とっ、とんでもございせん、御方さま。何故、わしが、このよ

うな者を知っていると」

しかし、そこは、やはり古狸、豺牙は狗姫の尋問に対し自分への嫌疑を頑強に否認する。

状況から見て未だ決定的な証拠がないことに思い至ったのだろう。言い逃れようと必死に語勢を強くする。

狗姫は、再度、問い掛ける。

「誓って、この者との関係はないと？」

「勿論でございますっ！」

豺牙は飽くまでも白を切り通そうとする。

とことん己の非を認める気持ちはないらしい。

（こ奴に慈悲は必要ないな）

狗姫は厚顔無恥の輩に対する沙汰を内心で決定した。そのまま厳しい面持ちで権佐に向き直り命じた。

「権佐、そ奴の猿轡いんぷを解いてやれ」

「はっ」

今度は猿轡を外された毒蛾の蛾々に狗姫が問う。

「毒蛾の蛾々とやら、聞いておっただろう。豺牙はそなたとは何の関係もないと言い切った。^{まじ}真か？」

もう逃げも隠れもできないと腹を括ったのだろう。

毒蛾の蛾々は、完全に開き直った態度で狗姫の尋問に応える。

「何の関係もない！？ ハッ、大有りだよ、見てただろう、狗姫の御方さま。三年前、俺が、人間の小娘を襲ったのは、全部、あの爺の差し金さ。おまけに、絶対、小娘には傷をつけないようにって、くどいくらい念を押されてね。何でかって、そりゃ、まず有り得ないと思うけど、小娘の死体が見つかった場合にさ、如何にも襲われましたって傷が残ってたら不味いだろ。万が一にも自分が疑われないうちって算段だよ。本当にあざといよね。だからさ、あの丸太はこっちの予定外だ、全くの偶然。それに、もう気付いてるだろうけど、さっきの扇から出てきた蝶、あれ、俺の式鬼なんだよね。殺生丸さまを籠絡するのに手を貸せて云われてさ。本当は嫌だったけど、そうしないと弟達を殺すって脅^{おど}されてさ」

すかさず狗姫が問い掛ける。

「兄弟を質に取られているのか？」

「そつ、だから逆らえなくてさ」

毒蛾の蛾々の反論に豺牙が噛み付いた。

蒼白だった顔色が一気に茹蛸ゆでたこのように赤くなっている。
興奮して、そのまま蛾々に掴つかみかかりそうな勢いだ。

「だつ、黙れ！黙れ！黙らんかつ！この女男がつ！」

「うるさいぞ、豺牙。権佐、そ奴を黙らせろ」

「はっ、仰せのままに」

ガシッ！

権佐が豺牙を羽交はがい絞めにして押さえつけた。

それでも大兵だいひょうの豺牙はバタバタと手足を動かして必死に逃れようとする。

しかし、権佐の拘束はビクともしない。

妖界でも三本の指に数えられる凄腕の妖忍の権佐である。

難なく大声で喚き散らす男を押さえて大人しくさせた。

「豺牙殿、お静かに」

そこへ新たなお庭番がやってきて狗姫の前で膝を折り小さな包みを手渡した。

ハラリ・・・

布の中から出てきたのは紅白の飾り紐。
それを手に狗姫が毒蛾の蛾々に訊ねる。

「毒蛾の蛾々よ、これに見覚えがあるう？」

蛾々はチラリと紅白の髪紐に目をやると答えた。

「ああ、そうだね、あの時、小娘から奪った髪紐だよ。でもさ、狗姫の御方さま、どうして此処にあるのかな。俺は、三年前、その爺に渡したのに」

「フツ、豺牙の屋敷から回収した。西国王の寵姫殺害の“動かぬ証拠”としてな」

その狗姫の言葉に豺牙が喰い付いた。

「なっ、何とっ、我が屋敷から持ち出したですとっ！御方さま、それは聞き捨てなりませんぞっ！その髪紐は、あの人間の小娘の物などではございません。我が娘、由羅の物にございます」

「そうなのか？」

狗姫が豺牙の娘、由羅に向かって問う。

由羅は頭の中で素早く計算した。

ここは父に掛けられた嫌疑を何としても回避しておかねばならない。でなければ明日からは罪人の娘として扱われ下手をすれば牢に繋される羽目にもなりかねない。

意を決した由羅は顔を俯^{うつむ}け如何にも殊勝な娘を装って答えた。

「はい、それは、間違いなく私の髪紐にございます」

殺生丸と狗姫は西国の最高権力者である。

その両名を前にして由羅は臆面もなく嘘をついた。

親が親なら子も子である。

面の皮の厚さは遺伝らしい。

一片の良心の呵責^{かしゃく}すら由羅は感じていないようだった。

その態度を見て狗姫は由羅に対する処遇も決めた。

（親子ともども慈悲は必要ないな）

「では、由羅とやら、これで髪を結ってみよ」

狗姫が髪紐をお庭番に手渡すと、その者は小走りで由羅の下へ。

「お安い御用ですわ」

由羅はニツコリと笑ってお庭番から髪紐を受け取った。

実に強^{したた}かな性根だ。

大した役者である。

そのまま由羅は自分の赤い髪を一房取り髪紐で結わえた。
次の瞬間、とてつもない絶叫が由羅の口から飛び出した。

「ギャア~~~~~ッ！ヒッ、ヒッ、ヒイ~~~~~！！」

由羅はバツタリと白目を剥^むいて倒れた。

その顔は凄まじい恐怖に醜^{みにく}く歪んでいる。

気絶した女の顔を見下ろしながら狗姫は殺生丸に話しかけた。

「ふむ、やはり、こうなったか。愚かな女だな。殺生丸、そなたは、
当然、予想しておっただろうな」

「当たり前だ。あの呪^{しゅ}は私が掛けたもの。りんに贈った品には全て
同じ呪^{しゅ}を掛けてある」

【補足】：りんちゃんの持ち物に掛かっている呪しゅについては拙作の『二人の巫女』を御参照下さいませ。

『きんしゅつじん錦繡事変？』に続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9880x/>

錦繡事変（きんしゅうじへん）

2011年11月4日14時05分発行